

太宰府の文華と公文書館だより 150

十返舎一九の天満宮案内

ページID：7241

文政6(1823)年、江戸の書肆、山口屋・岩戸屋から、十返舎一九作^{かんじんいちだいいんしやう}『菅神御一代文章』が出版されました。一九といえは『東海道中膝栗毛』を始めとする膝栗毛シリーズが大当たりした、江戸時代後期を代表する人気作者です。『菅神御一代文章』は、タイトルの菅原道真公の伝記を下段に、「筑前国太宰府天神宮境内之記」という太宰府天満宮の名所案内を上段に配した二本立てスタイルです。これは当時流行した往来物^{もの}というジャンルで、寺子屋などで教材として使われるほか、読み物としても楽しまれました。一九のほか、山東京伝^{さんとうきやうでん}、式亭三馬^{しきていさんば}、曲亭馬琴^{きやうていば}など人気の作者たちが、往来物を手がけています。

さて、天満宮の見どころを紹介した「筑前国太宰府天神宮境内之記」ですが、その記述は具体的かつ詳細で、まるで現地を見て書いたかのようです。ところが、一九が太宰府を訪れた事実はなく、とすれば、太宰府を描いた先行文献を参考にしたと考えるほかにありません。そこで『菅神御一代文章』刊行以前の紀行文を調べてみると、尾張の商人菱屋平七

(吉田重房^{よしだしげふさ}が著した『筑紫紀行』の本文をほぼ引き写していることがわかりました。

『筑紫紀行』は、享和元(1801)年3月に名古屋を出発し中国地方を経て九州にわたり各地をめぐった紀行文で、旅で見たもの聞いたことを大変具体的に記載しており、太宰府天満宮の描写も詳細です。旅の翌年の享和2年までには著され、文化3(1806)年に名古屋を代表する書肆永楽屋(東壁堂^{とうへきどう})から刊行されています。名古屋の書肆とも交流のあった一九が手に入れることは十分に可能で、これが種本と考えて間違いなさそうです。

「十返舎一九著」と明記して、他人の作品の文章を使用することは、現代の感覚からすると問題のようですが、江戸時代の出版界ではそう珍しいことではなく、特に一九はこうした手法をしばしば使っています。書肆の方でも、売れっ子作者の一九の名前で出版することが重要だったのでしょう。

かくして、太宰府に来たことのない十返舎一九による太宰府天満宮案内が世に出ることになったのでした。